精神保健福祉の理論と相談援助の展開

問題 36 次の記述のうち、第二次世界大戦後のアメリカの精神保健福祉に関する説明として、正しいものを1つ選びなさい。

- 1 クラブハウスモデルとしてファウンテンハウスが設立された。
- 2 精神科病院中心の医療からセクター制度への転換が進められた。
- 3 法律第180号を制定して公立精神科病院の閉鎖を国の政策とした。
- 4 精神科サバイバー・ネットワークがオヘイガン(O'Hagan, M.)らによって立ち上げられた。
- 5 「精神保健に関するナショナル・サービス・フレームワーク」が公表された。

問題 37 次の記述のうち、エンパワメントに関する説明として、正しいものを1つ選びなさい。

- 1 障害者が差別されず、社会の中に組み入れられていくこと。
- 2 専門家による最小限の介入で、自分の選んだ環境で落ち着き、満足できるようにすること。
- 3 逆境や困難を克服することで強化される、人間に本来備わっている復元力のこと。
- 4 人々がお互いに責任を果たすことで、個人の権利が日常レベルで実現されること。
- 5 社会的に不利な状況に置かれた人が、自己決定能力を高め主体的に行動できるようになること。

問題 38 精神科病院に医療保護入院しているMさん(30代, 女性)は, A退院後生活環境相談員の支援を受け, 退院後の生活についてイメージを育んできた。そのような中, Mさんの退院支援委員会が開催され, Mさんも参加した。そこで, 主治医より, 退院に向けた今後の治療方針が説明された。Mさんは不安なことや確認したいことについてA退院後生活環境相談員のサポートを受けながら, 治療プログラムの理解を深めた。その後, Mさんは治療プログラムに主体的に取り組み始めた。

次のうち, Mさんの主体的な取組を表す用語として, **適切なものを1つ**選びなさい。

- 1 インフォームドコンセント
- 2 アカウンタビリティ
- 3 アドヒアランス
- 4 コンプライアンス
- 5 シェイピング

問題 39 次の記述のうち, 精神保健福祉士が退院支援をしているクライアントから, 「俳優になりたい」と聞いたとき, プランニング段階での関わりとして, **適切なものを1つ**選びなさい。

- 1 症状の安定に努め, 俳優のことは退院後に検討することを伝える。
- 2 過去の職歴を聞き, 合っている仕事は何か一緒に検討する。
- 3 病棟での患者ミーティングの司会を担って, 人前で話すことに慣れるよう勧める。
- 4 俳優になるために何が必要かを話し合う。
- 5 入院中にオーディションを受けられるよう調整する。

問題 40 解決志向アプローチに関する次の記述のうち、正しいものを1つ選びなさい。

- 1 解決を要する問題行動の生じる頻度を測定する。
- 2 問題に対するこれまでの対処方法は用いず、新しい方法を提案する。
- 3 問題が解決した場合の状況について質問する。
- 4 専門的知見から、問題解決のイメージを提案する。
- 5 問題を解決するために、直接的な原因を追究して除去する。

問題 41 地域アセスメントに関する次の記述のうち、正しいものを1つ選びなさい。

- 1 介入を行い、地域の変化を観察する。
- 2 提供したサービスの効果を評価する。
- 3 地域で生活する精神障害者のもとへ出向いて働きかける。
- 4 地域における潜在的な資源力を把握する。
- 5 地域課題に対する援助を所属する機関で行えるか否かを判断する。

問題 42 次のうち、相談援助過程におけるモニタリングとして、正しいものを1つ選びなさい。

- 1 援助関係の契約
- 2 支援の進捗状況や適切性の確認
- 3 支援ネットワークの形成
- 4 相談援助過程の総括
- 5 ニーズの背景を分析

問題 43 B精神保健福祉士は、精神科デイ・ケアで自立生活に関する学習会を担当している。5回目のテーマは前回に続き「互いの経験から学ぶ」である。参加者Cさんが、「私は病気になって、自分なんて価値がないと思っていたけど、今は生きていていいと思えるようになりました」と話した。すると参加者Dさんが、「でもやっぱり、なんで病気になったんだろう」とつぶやいた。B精神保健福祉士はDさんの気持ちを受け止めて、Cさんに、「なぜそう思えるようになったのですか」と発言を促した。Cさんは、「前回、生き生きと自分の体験を語っていた人の話を聞いたことがきっかけですね」と話した。するとDさんが、「僕もあのようになんて生きていきたいなって思った」と語った。

次の記述のうち、B精神保健福祉士の促しによって、グループに生まれた効果として、適切なものを2つ選びなさい。

- 1 生活に必要な生きた情報が共有される。
- 2 社会的に必要なスキルを身に付ける。
- 3 他者の乗り越えた体験を知り希望を抱く。
- 4 自分だけの問題ではないという安心感を得る。
- 5 他者への関わりの結果から対人関係について学ぶ。

問題 44 障害者就業・生活支援センターに相談に来所したEさんは、これまで就職しては半年以内に退職することを繰り返していた。Eさんは、「いつも今度こそは長く続けようと思って仕事をするんですが、疲れてしまって、うまくいかないんです。仕事が続かない自分はだめなんです」と話した。F精神保健福祉士は気持ちを受け止め、「Eさんは、諦めずに何度も仕事に挑戦されていますよね」と話した。

次のうち、F精神保健福祉士の用いた技法として、適切なものを1つ選びなさい。

- 1 リフレーミング
- 2 アサーション
- 3 リンケージ
- 4 リフレクティング
- 5 ストレス・インタビュー

問題 45 Gさんの精神科病院での精神保健福祉援助実習は、中盤に差し掛かっている。この日、デイケアでは統合失調症のメンバーを対象とした社会生活技能訓練を行い、Gさんはコ・リーダーを担った。ロールプレイの場面でGさんは、それまでずっと発言しなかったメンバーHさんに対し、「今の場面で良かったところはどこですか」と発言を促した。すると、Hさんは何も言わずに怒った様子で部屋を出て行ってしまった。その様子を見たGさんは、何も言えずにぼう然としてしまい、その後のコ・リーダーとしての役割ができなくなった。夕方の振り返りでGさんは、「うまくできなくて、Hさんを怒らせてしまった。実習を続けていけるだろうか。精神保健福祉士には向いてないかも」と実習指導者Jさんに涙ぐみながら話した。

次の記述のうち、この場面で実習指導者JさんがGさんに行う実習スーパービジョンにおける発言として、**最も適切なものを1つ**選びなさい。

- 1 「今後はHさんと少し距離を置くようにしましょう」
- 2 「Hさんの行動は症状からくるものだから、大丈夫ですよ」
- 3 「ロールプレイ時の状況を振り返って、Gさんの行動を確認してみませんか」
- 4 「Gさんの担当教員に実習中断の連絡をしておきます」
- 5 「社会生活技能訓練をもう一度学ぶために課題を出します」

問題 46 Kさん(65歳)は、精神科病院に入退院を繰り返していたが、両親が他界してからは入院が数年続いている。現在は精神症状が軽減しており、病棟でも落ち着いて過ごしている。そこで、指定一般相談支援事業所のL精神保健福祉士も参加して地域移行に向けたケア会議が開かれた。Kさんは、「自分のような長期入院者が退院できるのか」「初めての一人暮らしで不安だ」「日中はどう過ごせばいいのか」「家事や日常生活での金銭管理に自信がない」と話した。

次のうち、この時のL精神保健福祉士がKさんに提案した内容として、適切なものを2つ選びなさい。

- 1 ピアサポーターとの交流
- 2 就労継続支援A型事業所への通所
- 3 障害福祉サービスによる療養介護の利用
- 4 グループホームでの宿泊体験
- 5 成年後見制度の利用

問題 47 次のうち、行政の精神保健福祉士が企画する精神障害者の生活上の困りごとを理解するための民生委員研修として、最も適切なものを1つ選びなさい。

- 1 精神科医による精神疾患の病因と症状に関する講義
- 2 行政職員による「精神保健福祉法」についての講義
- 3 精神科医による薬物療法の効果と副作用についての講義
- 4 民生委員の大変さを分かち合うグループワーク
- 5 小グループでの精神障害のある当事者との話合い

(注) 「精神保健福祉法」とは、「精神保健及び精神障害者福祉に関する法律」のことである。

問題 48 精神障害者のケアマネジメントに関する次の記述のうち、適切なものを1つ選びなさい。

- 1 精神保健福祉士が示した方針に基づき立案する。
- 2 社会資源の調整、改善及び開発を行う。
- 3 治療目標に沿って計画を作成する。
- 4 単一のサービス利用者を対象にする。
- 5 家族の同意を得てから実施する。

(精神保健福祉の理論と相談援助の展開・事例問題 1)

次の事例を読んで、問題 49 から問題 51 までについて答えなさい。

[事 例]

Mさん(30歳, 男性)は, 高校3年生の時に統合失調症を発症した。その後, 服薬を中断し, 幻聴によって大声を出し, 騒ぎになっては入院することが度々あった。25歳の時に高校の同窓会の案内が届いた。高校の同級生は皆大学を出て働いており, このままでは同窓会に出られないと思い, 治療を受け続ける覚悟を決めた。そして, 病気で受験を諦めていたが, 大学に入学し, 卒業後に同級生と同じように就職したいと思うようになった。それからMさんは, 服薬を継続し, 予備校に通い受験勉強に取り組んだが, 模擬試験で思うような成績が得られず, 焦りから両親への八つ当たりが増えた。ある日, Mさんは通院先の医療相談室のA精神保健福祉士に, 「両親から『受験をやめてはどうか』と言われてしまった。大学には絶対行きたいが, 再発して入院にならないか心配だ」と相談してきた。(問題 49)

Mさんは2年後に大学に入学することができ, 入学後間もなく学生支援室のBキャンパスソーシャルワーカー(以下「Bワーカー」という。)を訪ね, 心配事の相談をした。Mさんは, 「聞きたいことを先生にうまく伝えられない」「授業のグループディスカッションは, 参加したいのに緊張して議論に加われず, 休みがちになった」「頑張っても同級生に話しかけても, うまくいかず自信をなくした」「関心のある授業を取りすぎたせいか, 夕方の授業は疲れて内容が頭に入らない」と語った。(問題 50)

その後, MさんはBワーカーの支援を受け, 体調の波と付き合いながらも単位を取得し, 卒業の目途がついた4年次には企業のインターンシップに参加した。しかし, 緊張もあって社員の指示が理解できず, 簡単な書類作成をミスするなど失敗を重ね, 中断となってしまった。相談を受けたBワーカーは, 一緒にインターンシップの経験を振り返り, ミスを繰り返しても人に聞けなかったが, 慣れるまで時間がかかるもののパソコン作業は正確にこなせることが分かった。Mさんは, 「パソコン作業の仕事に就きたいが, 病気があり, 自信がない。学生生活やインターンシップと同じようになるのではないかと心配だ。会社には相談できる場はないし」と話した。(問題 51)

問題 49 次の記述のうち、この時のA精神保健福祉士の対応として、最も適切なものを1つ選びなさい。

- 1 再発が心配なため、大学受験を先延ばしにするよう勧める。
- 2 両親に心配をかけないように、ひそかに受験勉強することを提案する。
- 3 服薬を忘れないように服薬管理を両親に依頼する。
- 4 Mさんが行きたい大学のオープンキャンパスの参加を勧める。
- 5 一緒にクライシスプランを作成することを提案する。

問題 50 次の記述のうち、この時のBワーカーの支援として、適切なものを2つ選びなさい。

- 1 同級生に話しかける場面を設定し、ロールプレイを行う。
- 2 グループディスカッションを免除してもらうよう教員に働きかける。
- 3 卒業を最優先と考え、出席するよう励ます。
- 4 履修状況を確認し、必要な見直しを行う。
- 5 授業後に聞きたい点について、Mさんの代わりに教員に聞きに行く。

問題 51 次の記述のうち、この後のBワーカーの支援として、適切なものを1つ選びなさい。

- 1 緊張を克服できるように、アルバイトを幾つもやってみることを勧める。
- 2 就職時のジョブコーチの利用について情報を提供する。
- 3 パソコンスキル向上のために、就労移行支援事業所につなげる。
- 4 自信を付けるために、就労継続支援B型事業所の利用を提案する。
- 5 事務に限らず、営業や販売などにも広げて就職活動することを勧める。

(精神保健福祉の理論と相談援助の展開・事例問題 2)

次の事例を読んで、問題 52 から問題 54 までについて答えなさい。

〔事例〕

Cさん(25歳, 男性)は, 19歳の時に友人に勧められて覚醒剤を使用し, 警察に逮捕され, その後, 保護観察処分を受けた。保護観察期間が終わってからは, その友人とも距離を置き, 就職して23歳の時に結婚して子どもも生まれた。ところが新しい上司との相性が悪く, ミスを叱責されたことから口論となって仕事を辞め, 再び覚醒剤を勧めた友人と会うようになった。働かずブラブラしているCさんをみた妻は, 子どもを連れて家を出てしまった。Cさんは, 失意と孤独から抑うつ状態に陥り, 覚醒剤を再使用したいという欲求にかられ, 精神科クリニックを訪れた。診察した医師はクリニックで実施しているSMARTPP(せりがや覚せい剤依存再発防止プログラム)への参加を勧め, 担当のD精神保健福祉士がプログラム導入のための面接を行った。Cさんは, 面接室に座るなり, 「保護観察の時にも更生プログラムを受けた。本当に効果があるんですか」と疑心暗鬼な様子で尋ねた。D精神保健福祉士はCさんがクリニックに来たことをねぎらい, 面接を始めた。(問題 52)

Cさんは, D精神保健福祉士との面接を経て, プログラムに参加することになった。プログラムを始めたばかりのCさんは, 身体もつらそうで緊張した面持ちだったが, 「妻からは, 『覚醒剤を勧めた友人と縁を切って, 働くようになったらまた一緒に暮らしても良い』と言われた。頑張って妻と子どもに回復した姿を見せたい」と週1回の参加を続けた。4週目には, 薬物の再使用の「引き金」について考えるプログラムに参加した。Cさんは自分の「引き金」が対人関係のつまずきと考え, D精神保健福祉士やほかのメンバーと一緒にその対処方法について確認した。(問題 53)

その後, 順調にみえていたCさんだったが, プログラムが始まって2か月が過ぎた頃からイライラしてプログラムのメンバーと何度か言い争う姿がみられた。心配したD精神保健福祉士が, Cさんと面談すると, 「妻と子どものことを考えると, もう絶対覚醒剤はやってはいけないと思うが, ふとした時にまた無性に覚醒剤を使いたいと思うことがある」妻と子どもに会いたい」と訴えた。(問題 54)

問題 52 次の記述のうち、この面接時のD精神保健福祉士のCさんへの発言として、適切なものを1つ選びなさい。

- 1 「覚醒剤がいかに危険なものか分かっていますか」
- 2 「覚醒剤を使うことをどのように思っていますか」
- 3 「最初に、治療プログラムについて説明します」
- 4 「あなたがしたこと、ご家族がどんな思いをしたか考えてください」
- 5 「そのような態度では、覚醒剤を再使用してしまいますよ」

問題 53 次の記述のうち、Cさんと確認した対処方法として、適切なものを1つ選びなさい。

- 1 特に予定を入れずに毎日を気ままに過ごす。
- 2 覚醒剤を使用したくなる場面を徐々に増やす。
- 3 お酒を飲んでリラックスする。
- 4 誰とも連絡を取らず、一人で過ごす。
- 5 深呼吸して気分を変え、妻と子どもの写真を見る。

問題 54 次の記述のうち、Cさんの訴えに対するD精神保健福祉士の対応として、適切なものを1つ選びなさい。

- 1 プログラムで、今の気持ちをメンバーと共有することを提案する。
- 2 保護観察処分を受けたことがあるため、保護観察所に対応の指示を得る。
- 3 クリニックでのプログラムを中止し、司法のプログラムに変更することを伝える。
- 4 クリニックへの立入りを制限し、底つき体験を促す。
- 5 妻に連絡し、Cさんに会いに行くよう依頼する。

(精神保健福祉の理論と相談援助の展開・事例問題 3)

次の事例を読んで、問題 55 から問題 57 までについて答えなさい。

〔事例〕

人口7万人のQ市は、人口減少や世帯の小規模化が進み、地域のつながりの希薄化が課題となっている。X障害者基幹相談支援センターのE相談支援専門員(精神保健福祉士)(以下「E専門員」という。)はピアサポーターから、「地域の事業所は、精神障害への偏見の修正や生活のしづらさの改善のために、地域にどう関わり、支援に活かしているのか」と聞かれた。E専門員は地域内の取組を伝えながら、幾つかの課題が頭に浮かび、それを整理する必要があると考えた。そこでE専門員は、翌月開催されたQ市「協議会」の部会で、「各事業所及び事業所がある地区の強みと弱みなどを可視化して、現状や課題を探ってみませんか」と参加者に提案した。

その後、8事業所から参加協力を得て学習会を開催し、市内各地区のマトリックス表を作成した。実施後に参加者から、「地区別の各事業所の課題と役割が分かった」「市全域と各地区との関係が分かった」「現状を各地区の実践にどう活かすかが今後の課題だ」と報告があった。(問題 55)

E専門員は報告を取りまとめ、「この結果を実践に活かすために、各事業所が個々の支援で工夫していることや課題と、今回地区ごとに可視化できたこととを結び付けてみてはどうでしょう。それらを精査して、地区やQ市の戦略の方策を考えていきませんか」と学習会において新たに提案した。(問題 56)

その後、学習会で検討した結果、「取組はあるが、その実践スキルやノウハウが集約できていない」「取組成果が地域に発信されていない」「住民からフィードバックを受けられる仕組みが整っていない」ことが整理された。そこで「協議会」ではそれらを戦略の方策として、地域住民や当事者、その家族と事業所の協働で、地域実践を蓄積する方法を開発し、外部評価の仕組み作りを進めていった。この活動が継続していくと、参加する住民や団体も増え、Q市各地区での信頼感や結束力の高まりがみられるようになった。(問題 57)

(注) 「協議会」は、「障害者の日常生活及び社会生活を総合的に支援するための法律」に基づき、障害者等への支援体制の整備を図るため、保健医療関係者、福祉関係者等で構成される。

問題 55 次のうち、マトリックス表の作成時に用いられた方法として、正しいものを1つ選びなさい。

- 1 PERT法
- 2 グラウンデッド・セオリー
- 3 SWOT分析
- 4 デルファイ法
- 5 アクションリサーチ

問題 56 次のうち、この時点でE専門員が活用を意図したコミュニティソーシャルワークの機能として、適切なものを1つ選びなさい。

- 1 精神障害当事者家族の問題解決能力の向上
- 2 地域における新しいニーズの発見
- 3 新しい社会資源の創造
- 4 個と地域の一体的支援の展開
- 5 住民による地域福祉問題の早期発見機能の強化

問題 57 次のうち、この活動を通して地域に形成されたものとして、最も適切なものを1つ選びなさい。

- 1 ソーシャルベンチャー
- 2 ソーシャルファーム
- 3 コミュニティビジネス
- 4 コミュニティチェスト
- 5 ソーシャルキャピタル

(精神保健福祉の理論と相談援助の展開・事例問題 4)

次の事例を読んで、問題 58 から問題 60 までについて答えなさい。

〔事 例〕

F 精神保健福祉士が勤務する精神科病院に、10 日前、アルコール依存症の G さん (52 歳、男性) が入院となった。G さんはこれまで 2 度入院し、その都度 F 精神保健福祉士が担当していた。離脱症状が治まったため、F 精神保健福祉士は病棟の面接室で G さんと面接を行った。

G さんは、「大学を出て今の会社に就職して、趣味もなく仕事ばかりの生活だった。3 年前に管理職に昇進して、慣れない内容が増えてそのストレスを飲酒でごまかすようになり、そのうち時々早退して昼から酒を飲むようになった。その様子を見兼ねた妻が病院に連れて来た。今まで自分で酒を断とうとしたけど、うまくいかなかった。こんな僕だけど、家族のためにも酒のない生活に変わりたい気持ちはある。妻や社長からは、今回は入院してしっかり治して帰ってくるようにとされているけど、迷惑をかけて、つくづく自分はだめな人間だと思う」とやっと本音を話した。F 精神保健福祉士は、「そう思いつつも、G さん自身はこれから酒のない生活に変わっていきたいんですね」と話を続けた。(問題 58)

翌週、妻から面談の希望があり、F 精神保健福祉士が対応した。「私も仕事をしているのでお金のことは心配ない。でも、また夫が酒浸りになるんじゃないかと一人で考えていると胸が苦しくなってくる。このことは、誰にでも話せることじゃないし、どうしたらいいでしょうか」と相談された。そこで、F 精神保健福祉士は、「私たちも相談に乗りますし、地域にも相談できる所がありますよ」と提案した。(問題 59)

入院から 1 か月後、G さんを含めた病棟カンファレンスが開催された。その際、F 精神保健福祉士は、G さんが自宅へ退院しても断酒が継続できるよう、今後を見据えた G さんへの支援を提案した。(問題 60)

問題 58 次のうち、この時にF精神保健福祉士が行った面接として、正しいものを1つ選びなさい。

- 1 構造化面接
- 2 指示的面接
- 3 居宅訪問面接
- 4 動機づけ面接
- 5 生活場面面接

問題 59 次のうち、この時にF精神保健福祉士が妻に提案した社会資源として、正しいものを2つ選びなさい。

- 1 保健所
- 2 ギャマノン(GAM-ANON)
- 3 アラノン(Al-Anon)
- 4 婦人相談所
- 5 地域包括支援センター

問題 60 次のうち、この時にF精神保健福祉士が提案した内容として、最も適切なものを1つ選びなさい。

- 1 ひとりSSTの実施
- 2 アルコール依存症回復支援施設への入所
- 3 入院中からの自助グループ参加
- 4 日常生活自立支援事業の申請準備
- 5 復職を想定した職場の仕事内容の確認作業